『江戸川大学紀要』第 33 号（2023 年 3 月）pp. 323-334

保育者養成課程の大学生による スポーツボランティア経験の意味づけ

── 子どものスポーツ体験を支える立場として ──

守屋　志保*・蛯原　正貴**・大塚　紫乃***・村上　涼****

1. 問題

近年，スポーツを「支える」役割を担うスポーツボランティアの重要性が高まっている。スポーツボランティアが注目を集めるきっかけとなった出来事と言えば，2019 年に開催されたラグビーワールドカップ，2021 年に開催された東京オリンピック・パラリンピックが代表的であり，ラグビーワールドカップにおいては約 13000 人（特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク，2019），東京オリンピック・パラリンピックにおいては約 88000 人のボランティアが動員されている（オリンピック・パラリンピック準備局大会施設部調整課，2022）。そもそも，スポーツボランティアとは，「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において，報酬を目的としないで，クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり，また，国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて，専門的能力や時間などを進んで提供し，大会の運営を支える人のこと」と定義されており（文部省，2000），これまでのスポーツを「する」「観る」といった参画形態に加えて「支える」といった新たな参画形態を形成している。

スポーツボランティアへの応募者や参加者は 10 代から 20 代の割合が多く，ラグビーワールドカップへの応募や東京オリンピック・パラリンピックのフィールドキャストへの参加においても 20 代が最も多くなっていた（リクルート研究所，2022；笹川スポーツ財団，2020）。なかでも，大学生を中心とした学生の参加が多く，様々なスポーツボランティアにおける学生の参加は運営の要となっている。一方で，スポーツボランティアへの参加は，学生にも影響を及ぼすことがわかっており，特に，スポーツボランティア参加前後における意識の変容においては様々な研究が行われている。山下・行實（2015）は日本プロサッカーリーグ（J リーグ）に所属するクラブチームと連携し，運営ボランティアに参加した学生の意識変容について分析したところ，「チームへの意識」，「支える意識」，「観戦意識」，「接客意識」という 4 つの意識に変化が見られたことを報告している。また，社会人基礎力に着目した研究においては，「主体性」，「働きかけ力」，「実行力」，「計画力」，「創造力」，「発信力」，「状況把握力」，「規律性」の 8 つの項目が有意に向上したことを報告している（山下・行實，2016）。豊田・金森（2007）の研究においては，スポーツボランティア体験を

2022 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　こどもコミュニケーション学科教授
スポーツ科学，スポーツ心理学
** 江戸川大学　こどもコミュニケーション学科講師
体育，身体教育学
*** 江戸川大学　こどもコミュニケーション学科准教授
教育心理学
**** 江戸川大学　こどもコミュニケーション学科准教授
発達心理学，保育心理学

通して，「消極的態度→自己変容→ボランティアに対する態度の変化」という心理的プロセスを辿り，強制的参加から新たな挑戦に至る積極的変化，強制的参加から受動的理解に至る消極的変化を含んでいることを仮説的に導き出している。

運営を支えるだけでなく，参加者にも様々な影響を与えることが示唆されているスポーツボランティア体験ではあるが，参加学生の所属に焦点を当ててみると，体育・スポーツ系の学部に所属している学生よりも，それ以外の学部に所属している学生の参加のほうが多いことが明らかとなっている（清宮，2021）。

ボランティアへの参加については，教育系や保育系の学部（以下，養成大学）に所属する学生にその経験が求められることが多く，新谷（2017）は保育職を希望する学生に対して，実習前後の様々な不安の払拭や人間関係の基礎を学ぶという目的からボランティア経験が求められることを指摘している。また，木内ら（2013）は，東京都内の保育者・教員養成大学におけるボランティアの現状を調査し，実際に子どもと向かい合い，その思いを感じとったり察したりする力，人間関係を築く力，子どもと共有する時間をつくる力，全体を見渡す力といった「暗黙知」を獲得するためには，実習やボランティアといった現場に身を置く経験が必要であることを指摘している。

しかし，養成大学の学生がスポーツボランティアに携わる意義に着目した研究は極めて少ない。スポーツは子どもが主体として行う場合もある。子どもの関わるスポーツボランティアに参加することで，特に養成大学の学生にとっては，子どもの心身の発達に寄与するスポーツについて理解し，多くの学びが得られる可能性がある。

子どもの関わるスポーツボランティアに参加するということは，スポーツ指導についての理解を深めることにつながる。そして，子どもの才能や能力の育成を考えるとき，「素質か練習か」ということについては様々な議論がなされてきた。Ericsson（1993）は，スポーツに限らず，科学，芸術，ビジネスなどの幅広い分野にわたって世界一流に到達した人は早期から専門的練習「deliberate practice（集中練習）」を長期間継続することの有効性を論じた。また，deliberate practice とは，高度に構造化された意図的，計画的練習を意味し，スポーツ現場や一般社会にまで多大な影響を及ぼした。特にアメリカ社会において，Ericsson の理論は，「素質がなくても練習の積み重ねが夢を叶える」といった概念を生み出すことにもつながり，専門化をする時期を早め，勝利至上主義，商業主義など様々な弊害を生んできた。これに対してスポーツのシーズン制を導入し今日に至っている 。

このような背景がある中，日本では，1998 年から 2002 年にかけて日本オリンピック委員会（以下 JOC）による文部科学省委託事業が実施された。その中の 1 つである「競技者育成プログラム策定のためのモデル事業」は，1）バーンアウト，オーバーユースを防ぎ，選手寿命の長期化を図ること，2）国際競技力の急速な向上に対応するため「選抜・強化」から「発掘・育成・強化」への転換を図ることを目的として策定された。このことから，JOC が，心身の健全さを保つことで長期にわたって選手生活を送れるようになることと，スポーツとの出会いは運ではなく，発掘段階から競技団体が介入し，スポーツ参加者を増やすことの両方が，国際競技力向上の基礎となることと考えた結果であると捉えられる。

競技者育成方法には，4 つの類型モデルが成立すると考えられる。分類の方法として，1 つは，専門化のタイミングによる分類。もう 1 つは，そのスポーツに専門化する前の青少年期におけるスポーツ活動に仕方である。これにより，以下の 4 つの型に分類される。

1. 単一種目早期専門化型
2. 複数種目早期専門化型
3. 複数種目後期専門化型
4. 単一種目後期専門化型

順に下記に説明していく。

1. 単一種目早期専門型

1970 年～80 年代，旧東ドイツをはじめ旧東欧社会主義諸国は，タレント発掘・育成システムを

国家主導によるスポーツ政策として確立した。タレント発掘という発想は，国の人口規模に関係しており，人口の少ない国が人口の多い国と戦うために，少ない人口の中から人為的に優れたタレントを見出す方法として講じられた。

2. 複数種目早期専門型

「タレント発掘モデル」は幼少年期から１つのことに専念して取り組みことを推奨しているが，アメリカ社会は，子どものスポーツにおいて，早期専門化によって生じた様々な問題を解決するため，シーズン制を導入し，対処しようと考えた。シーズン制では，年間を通じて１つのスポーツだけでなく複数種目を経験しなければならないように制度設計されている。

3. 複数種目後期専門化型

子どものスポーツの過熱化，早期専門化によってさまざまな弊害がもたらされる状況は世界的な傾向であったため，子どもの健全で効果的な育成を目指し，21 世紀の初頭，世界各国で青少年期の競技者の育成に対する大きな見直しが始まった。まず，イギリスは 2002 年にスポーツ政策「ゲームプラン」を打ち出し，その中の施策として LTAD を提示した。そして，その他の国々も長期育成計画を打ち出した。Cote（2007）は，deliberate practice に対比させた形で deliberate play という概念を示し，思春期前には，非組織的スポーツ活動である deliberate play を豊富に経験することを勧めた長期育成モデル「スポーツ参加の育成モデル」（Developmental model of participation; DMSP）を提唱している。LTAD に代表される育成モデルは，競技者育成は長期的展望のもとに進められ，最終種目への専門化は急ぐべきではなく，発育発達段階での育成目標は目先の競技成績より，身体活動，スポーツ活動の基礎づくりに置くべきであるとしている。また，基礎づくりとは，身体活動を楽しく自信を持って意欲的に行うことができる運動スキル，スポーツスキルを養うことであり，そこには運動を通して仲間と協調し意思疎通できるという社会性も含まれる。

4. 単一種目後期専門化型

これは，青少年期に１つのスポーツを行い，その後に別のスポーツ種目を専門化するタイプである。

ここまで，子どもの才能や能力を開花させるためには，成長期のスポーツ活動における安全と健康管理において，健康や体力，心理などの領域で横断的な専門的支援の必要性が示されていること，また発育段階にあった，トレーニングなどを行い，バーンアウトやオーバーユースを防ぐことが，長期にわたって競技を続けていくためには必要になることなどを述べてきた。

スポーツ・コーチングに関する国際枠組み（2013）において，コーチは以前よりも様々な役割を担うことが要求され，勝敗にこだわるだけでなく，前向きな指導と選手の総合的な成長を重視することが求められるようになった。コーチの役割で重要なことは，選手の目標とニーズ，育成の段階を考慮し，競技特性に合った形で選手が成長できるように導くことであると考えられている。コーチの主な職務について，国際枠組みにおいて 6 つの主な機能／職務を規定している。

1. ビジョンと戦略の設定
2. 環境の構築
3. 人間関係の構築
4. 練習の指導と競技大会への準備，管理
5. 現場に対する理解と対応
6. 学習と振り返り

上記は，コーチが選手の成長に対して多くの役割を担っていることを示しており，選手の人生に重要な役割を果たしている。専門化する以前の時期の競技との出会い，指導者との出会いについても，環境の構築という観点から社会が重要な役割を担っていると考えられる。

このように，養成大学の学生に関しては，ボランティアに参加する意味づけや有効性の検討が行われてきており，運営を支えるといった本来の目的はもちろん，それに付随する価値の重要性が高まってきている。しかしながら，先に述べたス

ポーツボランティアに関しては，国家規模のイベントや企画が行われているにもかかわらず，養成大学の学生が参加する意味づけや有効性の検討が行われていない。体育系大学に所属する学生はもとより，養成大学の学生は将来，子どもの体育やスポーツに関わる機会が必ずと言っていいほど訪れるため，その意味づけや有効性の検討は重要な課題だと考えられる。

そこで，本研究では保育者養成大学に所属する学生を対象として，スポーツボランティアに参加する意味づけについて検討することとした。

2. 方法

2. 1　対象者及び手続き

ボランティア学生10名に，事前に説明会を行い，調査参加への同意を得た。その際，研究結果の倫理的配慮についての文書を配布した。

学生には，ボランティアの日誌として，Googleフォームに3日間，毎日記入をしてもらった。「具体的にどのようなことをしたか」,「子どもたちとの関わりのエピソードやその中で考えたこと」,「指導者の大人について観察したことやその中で考えたこと」,「実際にその日のボランティアを体験して，どのように感じたか」,「その他，率直に感じたこと」という観点を提示し，500字程度で記入をするように求めた。

ボランティア後に，日誌の内容をもとに，個別インタビューを行った。1対1の面接形式で，研究者4名がインタビュアーを担当した。体験を具体的に振り返るとともに，ボランティアについての自己評価を尋ねるようにした。自己評価の観点は，①子どもとの関わり，②自己表現，③勤務態度，④チームワークの理解であった。4つの観点は保育実習や教育実習（幼稚園）での評価を参照した。実習を通して身につけたい力が，ボランティアで育っているか考察するためであった。

また，ボランティア後にexPANDAのスタッフから，それぞれの学生について，自己評価と同じ観点から，評価をもらった。5名のスタッフが2名ずつの学生を担当していたため，5名の学生担当スタッフに回答をもらった。対して4つの観点の書かれた“実施後振り返り観点シート”を送付し，学生ごとに文章での評価を依頼した。

2. 2　イベント概要

・exPANDA 2022（表1）

2022年5月3日から5日にかけて静岡県富士市にある総合型スポーツ施設エスプラット・フジスパークにて小学校2年生から5年生を対象にマルチスポーツイベントが開催された。『exPANDA』とは，「expanda」＝拡大する・膨張させる・発展させる，「A」＝スタート・1つの・はじまる，を組み合わせた造語で，子供たちを中心とした可能性を信じ，関わる全ての人々で可能性を拡大できる場を創出していくイベントとして発足した。ミッションに掲げられたのが，1. 可能性を広げる 2. 早期専門性からの脱却 3. 花を咲かせるための経験をという3つである。

2. 3　分析方法

(1) 学生の語りの分析方法

分析は，下記の手順で行った。①各学生のインタビューの逐語録を作成し，②そのインタビューの逐語録と各学生のボランティアの日誌を，KJ法（川喜田，1970）を参考にして，データの類似性や共通性をもとにカテゴリー化をした。すなわち，インタビュー逐語録と日誌の内容を，意味単位で切片化して，それぞれの切片に概念を付与した。

(2) スタッフからの評価の分析方法

①子どもとの関わり，②自己表現，③勤務態度，④チームワークの理解の観点ごとに10名の学生の評価を並べ，全体としてどのような評価内容であるか，記述の似ている内容をまとめた。

表 1　イベント概要「exPANDA 2022」

5月3日（1日目）		5月4日（2日目）		5月4日（3日目）	
時間	内容	時間	内容	時間	内容
12:00	オープニングセレモニー	6:00-7:00	フリープレイ （アリーナで自由遊び）	6:00-7:00	フリープレイ （アリーナで自由遊び）
12:20-13:20	ダンス	7:00-7:15	朝片付け	7:00-7:15	朝片付け
13:30-14:30	スポーツ時間① ・バスケットボール ・ハンドボール ・フェンシング ・卓球	7:30-8:30	朝食	7:30-8:30	朝食
14:40-15:40	スポーツ時間②	10:10-11:10	スポーツ時間① ・サッカー ・ラグビー ・アルティメット ・野球	10:00-11:30	イベント
15:50-16:50	スポーツ時間③	11:20-12:20	スポーツ時間②	11:40-12:15	クロージングセレモニー
17:00-18:00	スポーツ時間④	12:20-13:30	昼食	12:30-13:30	昼食
18:00-18:45	入浴	13:30-14:30	スポーツ時間③	13:30-14:30	参加者解放、引き渡し
19:00-20:00	夕食	14:40-15:40	スポーツ時間④	14:40-15:00	スタッフ解散
20:15-21:00	オリエンテーション	16:00-17:30	大運動会（陸上）		
21:30	就寝	18:00-18:45	入浴		
22:00-22:20	スタッフミーティング	19:00-20:00	夕食		
		20:15-21:00	オリエンテーション		
		21:30	就寝		
		22:00-22:20	スタッフミーティング		

3. 結果

3. 1　学生の語り

(1) 子どもとの関わり（表 2）

各コードの内容に言及した人数は，①集団行動の制御は 7 名，②抽象的な好きから具体的な好きに変化は 1 名，③感情の表出は 1 名，④介入方法の模索は 6 名，⑤信頼関係の構築は 1 名，⑥不安の消失は 3 名，⑦人や環境への馴化は 2 名，⑧こども理解は 1 名，⑨気持ちの受容は 2 名，⑩印象の変化は 1 名，⑪指導に対する葛藤は 4 名，⑫視野に関する課題は 2 名，⑬喜びの認識は 2 名，⑭指導法に関する学びは 1 名，⑮安全に対する意識は 2 名，⑯子ども同士の関わりは 2 名であった。

ボランティアに参加した学生は，最初は子ども達に指示が通らず〈集団行動の制御〉が難しいと感じていたため〈介入方法の模索〉や〈子ども理解〉に努めた。特に，全体が見えていないという〈視野に関する課題〉や優しくするだけではだめだという〈指導に対する葛藤〉に関しては解決が難しかった。ただ，スタッフの動きから〈指導法の学び〉があったり，子ども達の〈人や環境への馴化〉が進むことによる〈信頼関係の構築〉が行われたりしたことで，自分自身の〈不安の消失〉へとつながった。子ども達と関わる中で，子ども達の〈気持ちの受容〉が大切であることはもちろん，時には一緒になって〈感情の表出〉をしてみたり，〈子ども同士の関わりを〉見守ったりと，その場に応じた対応が重要だと感じた。スポーツに関わるボランティアであるため〈安全に対する意識は〉保ちつつも，最終的には子ども達と関わる〈喜びの認識〉を高めることができた。ボランティア全体を通して，「子どもが好き」という感情が〈抽象的な好きから具体的な好きに変化〉したように，子どもに対する〈印象の変化〉が起

表２　振り返り視点「子どもとの関わり」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語りの一部
こどもとの関わり	①集団行動の制御	・言うことを聞かない子はまとめるのが大変で、そういう子をちゃんと並ばせたり、誘導したりするのはちょっとやっぱ３日間やってもまだ分からない部分がありました。
	②抽象的な好きから具体的な好きに変化	・子供が好きだったけど、具体的に好きになった。今までそんなに子供と関わっていなかった。
	③感情の表出	・そんなに自分の感情を表に出そうとは思っていないけど、今回は必要だと感じた。
	④介入方法の模索	・子供の方にもっと行ったほうがいいよと言われて、そうしてみたらうまくいった。担当のグループの先生の子供との距離の詰め方が上手だったので少しみながらやっていた部分もあった。
	⑤信頼関係の構築	・子どもが困ったことがあると、自分を頼ってくれたり、前日より言う事を聞いてくれる様になった。励ましたときに、ちゃんと嬉しそうな顔をしてくれるのが嬉しくて、結構ハードな一日でもそこにやりがいを感じる事で頑張る事が出来た。
	⑥不安の消失	・子どもと関わっていくうちに、不安はどんどんなくなって、少し自信がつくようにはなっていきました。
	⑦人や環境への馴化	・初日は初めて親元から離れる人が多くて、緊張していた。３日間を通して、自分自身もこどもたちも慣れてきた。
	⑧こども理解	・担任の先生と話をして、こどもの特徴を捉えて、接することができた。初日の夜のミーティングでこどもの傾向を教えてもらい、意識するようになった。初めて参加する子が多く不安に感じている子が多かった気がした。
	⑨気持ちの受容	・待機時間だとか、ご飯に行くまで食堂の移動までのちょっと空いた時間とかにおしゃべりしたり、今日どうだったとか聞いたりして、共感したりとか。体調を崩し、少し早めに休憩に入った子に寄り添い話し相手になった。
	⑩印象の変化	・低学年の子は仲間を思いやる意識が強くて、それが印象深くて、どんなに疲れていてもすごくみんな友達思いなんだなって。１日しかたってないのに、こんなに仲良くなれるのは小学生ってすごいなって。
	⑪指導に対する葛藤	・こどもの関わりにおいて、何も知らなくて、寂しさを与えないことだけが、怒るところは怒らないといけない。甘やかしすぎても良くない。優しくしてあげるだけが優しさではない。
	⑫視野に関する課題	・特定の子どもと関わることはできたが、視野が狭かったと感じるため、もう少し全体を見ながら行動ができたらよかった。
	⑬喜びの認識	・子ども達から見てほしいと言われたり、関わってくれたりすることで、癒しのほうが大きかったと感じた。
	⑭指導法に関する学び	・大人のコーチはすごくこどもに対しての指導が上手でダメな時はダメと叱るのではなく面白おかしく注意するなど工夫をしてでもできないところはしっかりやるように言うというメリハリのついた指導の仕方がすごく勉強になった。
	⑮安全に対する意識	・野球ってボールを飛ばすので、ぶつからないように子どもたちの場所を移動したりだとか、安全配慮はできたのかなと思います。
	⑯子ども同士の関わり	・３日間を通して親と離れていてしかも初対面の子もいる中、共に過ごせている子どもたちをすごいと思った。またすぐに打ち解けあっていてすごいと思った。

表 3　振り返り視点「自己表現」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語り
自己表現	①自主的に質問	・自分が気になったことやどうしたよいのかわからないことはすぐに聞いたり。質問をすることが多かったです。 ・わからないことをすぐ聞いていた。
	②子ども集団への指示	・思ったよりもスムーズにいかなかったです。「これやろうね」といっても聞き流されることもあって、上手くいかないこともありました。 ・なんとか子供たちの視線を集めるためにじゃんけんしよう等の声掛けを行う
	③コミュニケーションの深まり	・みんな最初から仲良くなったわけではないけど、卓球したり、夜話したりしたので、一気に仲が縮まった。 ・最初は手探りな感じだったんですけれど、やっぱ２日目とか３日目になるとお互いにコミュニケーションをとって
	④自己開示	・最初の方が思っていることが言えなかったり、ボランティア同士でも言えなかったり、子どもに対しても言えなかったんですけれど、日を重ねるにつれて子どもたちともボランティアとも心を打ち解けたことにより、自己表現、思っていることが言えるようになりました。 ・自分のことを知ってもらえたってことがあるので、関わり方自体は１日目よりは固くないというか、自然な感じで打ち解けられたのかなと感じています。
	⑤子どもへのアドバイス	・ここをこうしてみようといった少しの提案をすることも出来ました。
	⑥自己の成長	・ボランティアを終えて、大学生活の中でも自分から行くことができたので、成長ができた。
	⑦責任感の芽生え	・責任があるので、わからないことは聞くことができた。今までは自分で解決するか、仲のいい人にしか聞けなかったけど、責任感が芽生えた。
	⑧業務と立場の理解	・先生の話を聞かずボールで遊んでいる子に強く注意することが出来なかった。
	⑨モデリング行動	・大人のコーチの行動や言動をたくさん吸収してそれを生かせるように自分なりに子どもたちの面倒を見ることができた。

こった。

(2) 自己表現（表 3）

各コードの内容に言及した人数は，①自主的に質問は３名，②子ども集団への指示５名，③コミュニケーションの深まりは２名，④自己開示は４名，⑤子どもへのアドバイス⑥自己の成長⑦責任感の芽生え⑧業務と立場の理解⑨モデリング行動は，各１名であった。

ボランティアに参加した学生は，スタッフに〈自主的に質問〉することや，スタッフの行動を〈モデリング行動〉として，〈業務と立場の理解〉をした。日にちが進むにつれて，ボランティア仲間や子どもとの〈コミュニケーションの深まり〉を感じた。特に子どもとの関わりにおいては，自分が素の姿を出して〈自己開示〉をするように心がけた。〈子ども集団への指示〉の難しさを感じたが，次第に〈子どもへのアドバイス〉もできるようになっていった。ボランティアを通して〈自己の成長〉と〈責任感の芽生え〉を感じた。

(3) 勤務態度（表 4）

各コードの内容に言及した人数は，①時間管理の理解が３名，②疲労の蓄積が４名，③業務の自覚と理解が４名，④子どものための頑張りが１名，⑤主体的な働きが２名，⑥達成感が３名，⑦

表４　振り返り視点「勤務態度」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語り
勤務態度	①時間管理の理解	・次の日は、５分刻みでアラームかけて、絶対起きられるようにしました。 ・朝が大変で、朝が早くて。 ・集合時間を送れたことはなかった。
	②疲労の蓄積	・体の疲労だったりが溜まった状態。 ・少し疲れたり筋肉痛になったりと２日目にして限界でした。
	③業務の自覚と理解	・結構ハードな一日でもそこにやりがいを感じる事で頑張る事が出来た。 ・自分のやることは把握して子どもたちの引率だったりとか、ちゃんと子どもたちのことを見ていられたのではないかなと思います。
	④子どものための頑張り	・子どもが手を引っ張ってくれて、やっぱりがんばんなきゃと思えた。
	⑤主体的な働き	・（スタッフに）意見を言ったりはしました。 ・自分で動けたので、信頼を勝ち取る。
	⑥達成感	・自分で言うのもなんですが、よかったとは思います。自分では満足して取り組めたことがほとんどだったと思います。 ・頑張りました。
	⑦子どもへの関わりの反省	・もしかしたら（子どもたちに）怖かったりしたかなと、反省はありました。

子どもへの関わりの反省が１名であった。

ボランティアに参加した学生は，ボランティア期間が進むにつれて，タイムスケジュールに合わせて動くなどの〈時間管理の理解〉から始まり，しだいに〈業務の自覚を理解〉が進んだ。〈疲労の蓄積〉で限界を感じたが，〈子どものために頑張った〉。ボランティアの最後には〈子どもへの関わりの反省〉もあったが，〈主体的な働き〉ができたという〈達成感〉を抱いた。

(4) チームワークの理解（表５）

各コードの内容に言及した人数は，①情報共有の実践は７名，②報連相の重要性理解は２名，③リーダーへの敬意は５名，④関係性づくりのためのコミュニケーションは５名，⑤役割の分担は４名，⑥問題への気づきは３名であった。

ボランティア参加した学生は，〈情報共有の実践〉をしてチームの一員として動くことを意識できていた。その中で，〈リーダーへの敬意〉が生まれた。チームの仲間として〈関係性づくりのためのコミュニケーション〉をとり，３日間の中でもだんだんと良い雰囲気を作り，〈役割の分担〉をして，チームがうまく動けるように，目的を持った行動をするようになった。〈報連相の重要性理解〉や〈問題への気づき〉が生まれるのは，ボランティアでの経験を重ねた後であると考えられる。

3．2　スタッフからの評価

「子どもとの関わり」については，「個別の対応ができていた」という内容が３名，「子どもへの積極的な関わりができていた」という内容が３名，「子どものことを考えた工夫した関わりができていた」という内容が２名，「欠ける視点もありながらも丁寧な関わりができていた」という内容が２名であった。「皆と動けない子や，泣いてしまっている子を特に気にかけ，安心感を与えつつ寄り添ってくれていた」とスタッフからの記述があり，ボランティアを通して，子どもへの個別の対応ができていたことが窺えた。自ら話しかけ，コミュニケーションをとる姿がスタッフの方から評価され，積極性を発揮できた学生もいた。「子ども達から話しかけられて，それに応じることが多く見受けられたが，その際は，子どもに対して丁寧に応じていた」のように，欠ける資質もありながら，丁寧にかかわるという経験ができた学生もいた。

表５　振り返り視点「チームワークの理解」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語りの一部
チームワークの理解	①情報共有の実践	・学生ボランティアでも情報を共有して、忘れないようにすること、保護者から言われたことなどはすぐに共有するようにした。 ・活動が終わって振り返りの時間に、「この子どうだった」といった形からコミュニケーションはとれていた。
	②報連相の重要性理解	・こまめなホウレンソウをしっかりすることで、チームワークを作っていた。 ・ホウレンソウの重要性。本当に細かいことでも言っておくとつながる。ちょっとした変化でも共有することが必要。
	③リーダーへの敬意	・他のコーチが上手くまとめてくれたから何とかできた。 ・運営のほうに携わることが本当にないのでどのようにしたら楽しめるか、怪我無く遊べるか、というのを常に考えながらやっていた裏方がすごいと思った。
	④関係性づくりのためのコミュニケーション	・ボランティアをやる上で、休憩の時とか初めて話して、先輩たちが普通に接してくれた。３日目には、みんな仲良くなった。 ・初めて話す子しかいなくて。だから不安だったんですけど、すごいみんな話しかけてくれたり、話しかけたりしたら応じてくれて。
	⑤役割の分担	・この子をあっちのチームに連れて行ってみたいな感じで分担してという感じですかね、私がこっちの子を案内するから、こっちの子をあっちのチームに連れて行ってみたいな。 ・私がこっち側見ます、先輩こっち側見ますとかで、そこで連携がとれてうまくいけるようになりました。
	⑥問題への気づき	・女の子が髪を乾かす時間がないと言っていて、お風呂が押してしまったことがあったので、お風呂の時間を長くすることはできませんか、といったことは話をしました。 ・引き渡すまでに時間がかかったなと思いました。連携がうまく取れていなくて、指示もよくあまり聞こえなくて、ちょっとごたつきがあったんだと思います。

「自己表現」については，「自分なりに行動をとれていた」という内容が４名，「主体的な発信や行動があった」という内容が４名，「受身的であった」という内容が１名，「リーダー的であった」という内容が１名であった。「業務の状況を自分なりに把握し，必要な行動をとろうと努力していた」のように，自分なりに状況を理解し，行動ができていた。さらに「こちらからの指示だけでなく，自らの考えで動いてくれた」のように，主体的に考え，発信し行動できていた学生もいた。受身的な学生もいたが，リーダー的な存在として学生をまとめる上級生もいて，それぞれの水準に合わせた働きを経験できたと思われる。

「勤務態度」は全員について良好で，積極的に業務に携わる姿が窺えた。概ね自分のすべきことを理解して動けてはいたが，業務の多さによる疲れがあったためか，遅刻や休憩時間中の睡眠など，注意の必要な点はあった。

「チームワークの理解」については，「自分の役割や立ち位置の理解をして一員として働けた」という内容が２名，「コミュニケーションが取れていた」という内容が２名，「協力する姿勢で，チームワークを発揮できていた」という内容が２名，「チームワークについてさらなる理解の必要性がある」という内容が４名であった。自らの役割を理解した働きはできていたが，全体を把握し

て，臨機応変に対応する力が十分ではなかった。グループに所属しない全体を見る担当の場合には，協力する姿勢でチームワークを発揮できていたようだった。「自らのポジションを確実に実行することでチームの一員として十分機能していた」のように，基本的なコミュニケーションをとり，自分の役割を理解して一員として動くことはできていたと推測される。

4. 考察

学生の語りを分析した結果，「集団行動の制御」，「こども集団への指示」，「指導に関する葛藤」などに関する語りが多く，子ども達に指示を出したり，まとめたりする際に困難さを感じていたと考えられた。増山（2013）の学生による子どもを対象とした運動遊びの指導に関する研究においても，指導に対する自己評価を分析したところ，「場の把握」や「伝達方法」に困難を示していたことから，運動が生じる場面の関わりは学生にとって難易度が高くなる可能性が示唆された。スポーツボランティアは運動を行うことが前提となっているため，動いている子ども達に指示を出したり，集団としての動きを制御したりと，他のボランティア以上にリーダーシップやコミュニケーション能力が求められる。そのため，学生にとっては困難さの伴う大きな課題となるものの，徐々に自信がついていったという語りや達成感が得られたといった語りもあったことから，課題に向き合うことで，リーダーシップやコミュニケーション能力を高めるための有効な場になると考えられた。

また，「情報共有の実践」や「業務の自覚と理解」，「役割の分担」といった内容も多く語られており，こちらは山下・行實（2016）が行ったスポーツボランティアへの参加が社会人基礎力を向上させるという研究を支持する結果となった。具体的には，経済産業省（2006）が示している社会人基礎力の中で，「チームで働く力」を構成する「状況把握力」に変化があったと考えられた。「状況把握力」は「周囲から期待されている自分の役割を把握して，行動することができている」，「自分にできること，他人ができることを的確に判断して行動することができている」，「周囲の人の状況に配慮して，良い方向へ向かうように行動することができている」という3つの項目から構成される下位尺度であり，本研究で見られた語りの内容を多分に含む尺度となっている。スポーツボランティアは参加者の活動量が比較的多いことから，他のボランティアに比べて事故やケガの発生率が必然的に高くなる。そのため，指導者や各担当者が自己の役割や周囲の状況を的確に把握し，高い自覚をもってボランティア活動に臨むことが求められると考えられた。山下・行實（2016）の研究においても，活動前後の「状況把握力」に有意な差が認められただけでなく，変化の大きさを示す効果量が大きかったことから，スポーツボランティアへの参加は「状況把握力」の向上に大きな影響を与える可能性が示唆された。

子どもやスタッフとの関わりについては先述したように多くの語りが得られたが，「疲労の蓄積」や「時間管理の理解」といった自己管理に関わる語りも比較的多く得られた。今回のイベントは2泊3日の泊まり込みで行われたため，ボランティア学生も参加者とともに泊まり込みで業務を行っていた。食事や入浴の指示はもちろん，環境が変わったことにより眠れない子への対応など，スタッフの業務も多岐にわたっていたといえる。そのため，精神的な疲労はもちろんのこと，身体的疲労も溜まった状態でボランティアに参加することとなり，スタッフ評価にもあるような遅刻や休憩時間中の睡眠といった注意点が見られたと考えられる。スポーツボランティアは先述したようなリーダーシップやコミュニケーション能力，状況把握力といった能力の向上において，他のボランティアよりも高い効果が見込まれる一方で，ボランティアスタッフ自身も体を動かす機会が多いことから，身体的疲労が蓄積しやすく，その結果，判断力や対応力の低下へとつながる可能性が危惧される。

以上の考察を踏まえ，保育者養成大学の学生がスポーツボランティアに参加する意義について検

討した結果，保育を行う上で重要とされているリーダーシップやコミュニケーション能力，状況把握力といった非認知能力の向上に有効である可能性が示唆された。また，スポーツボランティアに参加することで，スポーツに関する知識が得られる，興味・関心が高まる，視点が変わる，魅力に気づくといったスポーツへの理解が深まるといわれており（音成，2017），スポーツボランティアでの経験が保育現場におけるスポーツ，運動指導に活用できることが期待される。保育所保育指針ならびに幼稚園教育要領，幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「健康」の領域には「幼児が興味や関心，能力に応じて全身を使って活動することにより，体を動かす楽しさを味わい（略）多様な動きを経験する中で，体の動きを調整する」と記載されている。スポーツボランティアの経験は，学生にとって，こうした保育指針等に記載されている子どもの身体の動きを実践的に知り，保育における運動指導を考える機会を提供するとみられる。

これらのことから，保育者養成課大学所属する学生がスポーツボランティアに参加することは，保育者に必要な素養を高めることに加え，子どものスポーツ体験を支えるためのスポーツ理解を深められる可能性が示唆された。

参考文献

内閣府（2017）：幼保連携型認定こども園教育・保育要領.

Ericsson（1993）：The Role of Deliberate Practice in the Acquisition of Expert Performance，Psychological Review（100），363-406.

国際コーチング・エクセレンス評議会・夏季オリンピック競技国際連盟連合・リーズ・メトロポリタン大学（2013）：「スポーツコーチングに関する国際枠組み第1・2版」.

伊藤静夫（2018）：タレント発掘からタレントトランスファー（LTAD）へ～発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究：アスリート育成モデルの構築（第1報）：海外におけるアスリート育成モデルの検討～，日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告集，9-15.

日本スポーツボランティアネットワーク（2019）：公式ボランティアプログラム「NO-SIDE」活動レポート.

川喜田二郎（1970）：続・発想法　KJ法の展開と応用，中公新書.

木内菜保子・森薫・佐々木由美子・小林久美（2013）：東京都内における保育者・教員養成大学の学生ボランティアの現状，東京未来大学研究紀要（6）33-40.

清宮孝文（2021）：スポーツボランティアに対する他律的なイメージと属性の関連性―大学生に着目して―，環境と経営：静岡産業大学論集，27（2），73-79.

窪康之（2018）国内中央競技団体におけるアスリート育成実態調査について～発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究：アスリート育成モデルの構築（第1報）：海外におけるアスリート育成モデルの検討～，日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告集，47-52.

増山尚美（2013）：学生による子どもを対象とした運動遊びの指導について－2012年度. 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報，(4)，31-38.

文部省（2000）：スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議.

文部科学省（2017）：幼稚園教育要領.

厚生労働省（2017）：保育所保育指針.

経済産業省（2006）：「人生100年時代の社会人基礎力」と「リカレント教育」について.

オリンピック・パラリンピック準備局大会施設部調整課（2022）：東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会フォローアップ報告書，403-420.

音成陽子（2017）：大学生のスポーツ・ボランティアのあり方，流通科学研究，17（1），25-38.

リクルートワークス研究所（2022）：オリンピック・パラリンピックのボランティア・レガシー　―東京2020大会から未来へのバトン―.

笹川スポーツ財団（2020）：ラグビーワールドカップ2019大会ボランティアに関する調査.

新谷龍太朗（2017）：保育職志望学生におけるボランティア体験の意義，保育研究（47），34-43.

豊田則成・金森雅夫（2007）：スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？ びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」か

ら，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要（4），9-18.
山下博武・行實鉄平（2016）：大学と J クラブの連携によるスポーツボランティア活動の評価：社会人基礎力に着目して，体育・スポーツ経営学研究（29），33-48.
山下博武・行實鉄平（2015）：徳島ヴォルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス，体育・スポーツ経営学研究（28），33-51.